

会場：池袋キャンパス5号館 5124 教室および zoom ウェビナー

加えて、宗教的側面からも不安定性の連鎖が強化されている。イスラム教における婚前交渉の禁止という規範が個々人に内面化されており、意図せぬ妊娠・出産は宗教的・文化的な「恥」とみなされやすい。こうした規範の内

第 96 回 ジェンダーセッション

# リフ・ロダケティフ・ジャシスナシ

在日インドネシア人移住女性とのトランスナショナルな不安定

日時： 2015 年 10 月 30 日（木） 18:00 ~ 19:30

場所： 立教大学池袋キャンパス 5 号館 5124 教室

女性移民性として、妊娠や出産を通して「雇用の移行」や「滞在資格の移住」とをめぐり、劇画的に「移住」してゆく女性。日本の国境上では「移住」を意味する「結婚移民」や「結婚移民」などがある。結婚移民制度の元では「移住」が「結婚」の継続を前提とする重要な事柄が待っている。こうした状況は雇用と移民の間に問題に結びつき、制度構築のもとに起因している。さらに、女性労働出身国と受入国の雇用の規制の差によって、経済的な不安定な状況の元には「移住」が「トランスナショナル・プレザンシー」-Transnational Presence- によって行われ、また、リフ・ロダケティフ・ジャシスナシ Reproductive Justice の意味の「リフ」も持つ「ロダケティフ」を意味する「ロダケティフ」。「ロダケティフ」は「移住」を意味する「ロダケティフ」を大きく制約するもの。

本講演では、在日インドネシア人女性移民労働者による、妊娠や出産をめぐり「移住」が「移住」によって行われ、また、リフ・ロダケティフ・ジャシスナシ Reproductive Justice の意味の「リフ」も持つ「ロダケティフ」を意味する「ロダケティフ」を大きく制約するもの。

講師 **ワオチ・ハニワ・イスティクワ 氏**

リフ・ロダケティフ・ジャシスナシ Reproductive Justice の意味の「リフ」も持つ「ロダケティフ」を意味する「ロダケティフ」を大きく制約するもの。

対価とオンラインの「リフ・ロダケティフ・ジャシスナシ」  
 定員 対面： 60 人 / オンライン： 1000 人  
 +お申し込みはこちら <https://s.rikyoo.ac.jp/nqv22hr>  
 締切： 10 月 29 日（水）

主催： おいねいむすび 立教大学ジェンダーフォーラム  
 TEL: 03-3985-2307 E-mail: gender@rikyoo.ac.jp  
<https://www.rikyoo.ac.jp/research/institute/gender/>

面化によって問題が不可視化され、当事者が周囲に相談することを極めて困難にする状況が生み出されている

他方、こうした不安定の連鎖を断ち切る方策として、妊娠・出産による退職や帰国を迫られた実習生が、支援者との繋がりによって日本滞在を継続できた事例も紹介された。しかし、出産後の子の在留資格は入管の裁量に委ねられており、支援者による個別介入だけでは構造的な解決には至らない。現状では「安全に子育てをする権利」まで保障されているとは言い難いのである。

ワオデ氏は、移住労働者が単なる「経済的な労働力」としてのみ位置付けられているからこそ、妊娠・出産が制度的に「労働の中断」とみなされるのだと指摘する。移住女性の妊娠・出産は決して個人的な問題ではなく、国境を越えた制度的・社会的構造によってリプロダクティブ・ライツが剥奪されている実態があり、それが冒頭で言及した広島での事件へと繋がっている。移住女性の妊娠・出産は自由な選択に委ねられず、常に他者からの「管理」と「保護」の対象とされてきた。こうした現状を打破するためには、リプロダクティブ・ジャスティスの観点からの議論が不可欠であると締めくくられた。

質疑応答では、非常に多角的な視点から活発な議論が会場およびオンラインで展開された。具体的には、妊娠・出産時における男性側の対応や責任、送り出し機関による教育の実態、実習生が日本を選択した背景、技能実習法における保護構造の不備などが挙げられた。

また、登録支援機関の果たすべき役割や、宗教コミュニティの指導者の見解、インドネシア国内におけるリプロダクティブ・ヘルス／ライツに関する知識と実践状況についても議論が及んだ。さらに、出産に伴う経済的不安を支えるセーフティネットの課題や、渡航前に行われる妊娠検査の詳細など、実務的・構造的な問題についても関心が寄せられた。



(ジェンダーフォーラム事務局 大野聖良)